

アフリカ宗教学会 (AASR) 第 9 回大会 参加記

2023 年 8 月 2 日から 4 日にかけて、ケニア・ナイロビ大学(The University of Nairobi)で、アフリカ宗教学会(African Association for Study of Religions)の第 9 回大会が開催された。大会テーマは、“Creativity, Innovation, and imagination in African Religions”である。アフリカを中心に 10 の国から 100 名ほどの研究者が集まり、研究報告やミーティングを行った。

AASR は国際宗教学会(International Association for the History of Religions, IAHR)の提携学会の一つで、1992 年にジンバブエで結成され、1995 年に提携学会として認められた。定期大会は 5 年のうちに最低 2 回行うこととなっているが、コロナウイルスによる 2020 年大会の中止によって、2018 年の第 8 回大会から 5 年ぶりの開催となった。

今大会では、1 つの基調講演と、2 つの Plenary Session が行われた。基調講演はハルカノ・アブディ・ワリオ(Halkano Abdikadir Abdi Wario)氏によるもので、国際的なイスラームテロ組織の宣伝戦略に対抗するための、ポスターや図像を用いた広報戦略について、ケニアでの事例を中心に紹介した。Plenary Session は、マリー・ゲトゥイ(Mary Getui)教授とムウェンダ・ンタラングウィ(Mwenda Ntarangwi)氏によって行われた。ゲトゥイ教授は、“Virtue”という価値観を中心にどのように創造性や想像力を働かせていくかについて、その可能性を語った。ンタラングウィ氏は、ナイロビ市内を中心に、いわゆる主流派の教会から離れたオルタナティブなキリスト教の姿について、事例紹介を行った。いずれも、発表者の経験や実践に即した語りが行われており、アフリカにおける宗教学の展開について伝聞だけでは伝わりづらい生の状況がわかる講演であった。

筆者は、“Widows in the Ethiopian Orthodox Hagiographies”の題で、修士論文の一部を抜粋する形で 15 分ほどの口頭発表と質疑応答を行った。教室の機材の不調に加えて（直前の発表者が精霊について言及した際に、精霊の怒りを買ったのが原因なのではないかと笑いが起こった）、筆者にとってははじめての学会発表、しかも英語発表であったため、いっばいいいっばいの状況であった。しかし、会場は真剣に研究報告を聞いてくださり、さまざまな質疑応答が行われた。

発表の間には、軽食とお茶を振る舞われる時間があり、数多くの研究者と交流を行うことができた。さまざまな研究者が活発に交流しているため、次のパネルセッションの開始が遅れることもしばしばであった。必ずしも筆者と関心の近い研究者ばかりではなかったが、どのような関心のもと研究を行ったかについて、丁寧に話しあってくれる研究者が多く、また各国の研究状況について見識を深めることができた。特に、日本国内からの情報収集では、どうしても偏りが生じて集めきれないアフリカの宗教学の状況について、生の情報に触れることができたのは貴重な経験であった。特に、参加するアフリカの国が英語圏に偏っていて、フランス語圏のアフリカ諸国の参加の少なさが課題であるという問題については、宗教学自体のコロニアルな側面を強く意識することとなった。

初めての国際学会での参加であることに加えて、日本からの参加者は私一人であったこともあり、初めはかなり心配な部分もあったが、ナイロビの寒さに反して温かく迎えていただいた。筆者と同様に博士課程在籍の学生や他の大学で指導している教授たちに自らの研究状況について相談し、励ましやアドバイスをいただくことも多く、博士論文の執筆に向けて研究を進めていくモチベーションを高めるいい機会であった。

今回の学会参加は、藤原先生にご紹介していただいたものであったが、これからも臆することなくさまざまな場で活動していきたいと思えるものであった。宗教学は、決して一つの場所で完結するものではなく、さまざまな地域での実践や歴史が絡まりあっている。その地を訪れ、その地の人と話さなければ理解できない点も数多くある。今後もさまざまな場に挑戦していければと思う。

文責：加藤 基

写真

基調講演などが行われたナイロビ大学の会場の様子

